

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別授受認許誌第六二七号
平成二十五年三月一日発行（第四百十六卷第三号）

ホトトギス

三月号



俳句随想 〔三百六十九〕

汀子

私は出来るだけ添削をしないことにしている。余程勿体ないと思う句があれば添削をして選する。「天地有情」で無季の一句があった。竹林を上五で描いた句であったので「竹林」を「竹の秋」と入れ替えて選んだ。やがてその句が誌上に載るとその作者から手紙が来た。そこには添削した為に一句の中に季語が二つになってしまったのであるがいいのですか？という意味が書かれてあった。

もう一つの季語とは何であろうか。下五に「……和風かな」とあるが他に季節の言葉は見つからない。「和風」を季語としてしていることと分った。辞書を引いて驚いた。

「和風」①日本在来の風習。日本風。「——建築」——洋風。②おだやかな風。暖かな風。春風。②の最後に春風とある。しかし、よく考えてみると、和風≠春風ではない。

我々は、季語と言わないで季題と言う。季題とは、歴史的に歌人や俳人によって磨き上げられてきた季節の言葉である。と同時に、それらは自然に対して鋭い感受性を持つ日本人一般の季節感によって裏打ちされてきた美しい言葉である。また一つ目は季節感が豊かな季の言葉である。二つ目は歴史的な背景を持つ言葉である。三つ目は日本人の生活に溶け込んだ言葉である。季語ではなく季題ということの意味を考えて欲しい。

旬日記 汀子

平成二十四年三月三日 芹屋 ホトトギス会

飾るより雛の句会となりしかな
山笑ひぬしに心の添ふ日かな
三月四日 下萌句会

暖かき日和は崩れ易きかな
夕刻にずれ込む会の暖かし
端正な牡丹の芽でありしかな
八十路には薄味仕立蜆汁

三月五日 ロイヤル俳壇

春雷を伴ふ雨と諾へり
春障子閉めて一つの会閉ぢぬ
飯蛸といふも親指ほどのもの
春雷に遅れをとつてをりにけり

明日も又雨の旅立春の雷
三月八日 清交社
蟻の道消しこの辺り流れ急
たんぼぼの素通り風の野なりけり
遠くより近づく程に山笑ふ
見慣れたる六甲にして山笑ふ
暖かき今日明日は明日旅支度

三月九日 工業倶楽部

わが据えし母の背中の二日灸
白酒にさへも酔ひしといふ男
東京にふたたび春の雪の朝
春の雪降るかな知れぬ旅路かな
白酒のとろりと酌みてなみなみと
三月の一年前の会のこと

三月十日 関東ホトトギス俳句大会前日句会

冴返る日の旅立と記憶せん
春の雪景色も旅の一部分
印象の去らぬ明るき春の雪
集合は軽井沢駅春の雪
軽井沢には春の雪よく似合ふ
三月十一日 関東ホトトギス俳句大会
語ること多き一年冴返る
彼の日とは三月十一日のこと

三月十一日 関東ホトトギス同人会
木々の芽を促す露の隠す景
一年といふ歳月の語る春
雪解露ヘアビョウより抜けて
三月十三日 大阪倶楽部

雛飾りそこが客間となりけり
春雷の予報素通りしてゆきぬ
東京も荒れし朝なりお水取
詩心は深く蔵して西行忌
三月十三日 絹業倶楽部

紅梅の盛りとなりてぬし家路
春の雪より抜け出でし旅路あり
桃活けて即ち桃の節句かな
東より展げゆく旅春めける
三月十九日 アサヒカルチャー
朝帰りとは春らしき旅路かな
朝月を見し快晴の旅の春

三月二十日 有恒俳句会
春光の朝の目覚めでありしこと
春分の日のくつろぎの会に似て
存在の芽の確かさにチューリップ
午後からの水温みゆく庭の音
水温む光と影の音の中

三月二十日 無名会
西行忌み吉野の旅近づけて
お水取済みしくつろぎあることを
お水取済めば予定の待つてをり
あたたかき日よあと戻りあと戻り
紅梅の日の会二つ木戸抜けて
三月二十一日 夏潮句会

晴れてゆく霞の行方追はずとも
牡丹の芽競ひあるかに十株ほど
初花の遅れぬしこと納得す
一斉に芽吹き庭となる日和
春芝をづかづか踏んでみたくなる
チューリップ芽立つ力の余るほど
三月二十二日 さとらぎ会

如月の陽気に左右され乍ら
旅立を控へし一日蜆汁
如月の木々の明るき旅心
快晴にして如月の旅路かな
島で逢ひ都心で会ひぬ麗かに
三月二十三日 時雨句会

蒲公英の野に降り立ちてよりのこと
流水を見て欠航の帰路となる
降るといふ止むといふ雨春のもの
暮れてより落着く春の雨の音
三月二十四日 句会と講演の会
隠し味蒜にある好き嫌ひ
蒜に味のひと押し二押しも
春祭大地色めく頃となる
三月二十八日 悼 百崎つゆ子様
温顔を霞の果に見失ふ

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十四年三月一日 蕉心会

カツカレー全部平らげ腹うらら
ふらここに下町の風集まり来
やつと咲く白梅に館目覚めゆく
咲くものを散らし過ぎゆく木の芽風
大川の波間に春の浮び来る
そら庵に入るうららそらあんだやる
麗かや地に鳩水に百合陽
白梅のまだこれからといふ氣負ひ
散るものもありこれからもありて梅

三月一日 六甲会

シルヴァレグリーンアスパラガスダンケ
川幾つ越えて故郷水温む
水温むあの日を思ひ出せはなほ
蝦夷の意気詰めてアスパラガス出荷
水温む鶴塚橋の懐に
オランダーズソース彩る松葉独活
温む水ちよこんと弾く佳人かな
三月三日 明石の春を詠む吟行俳句会

濠の水温む城址の歴史秘め
大漁旗てふ麗かなマストかな
三月四日 虚子記念文学館投句

笑ふ山新快速の突き抜けて
三月四日 野分会音屋例会

一閃に燕と判る距離であり
燕飛ぶ高度三メートルの宙
三月七日 ひとり文芸ミュージカル「三毛子」鑑賞
猫の恋佳人の舞台なればこそ

三月八日 土筆会

雛の目光りて納められにけり
大会を控へて雛の間の静寂
雛の忌てふ紫に烟る日よ
芋の芽の伸び加減てふ植系加減
三月十一日 関東ホトギス俳句大会

神杉の神の声とも初音かな
信州の残雪踏んで上州へ
一ト年を偲ぶ心に冴返る
せせらぎの音の高さに水温む
三月十一日 といふ忌心に
三月十二日 朝日カルチャー若草句会

稜線といふ霞吐く角度かな
都心のど真ん中といふ木の芽晴
朝霞より抜け出して来し鳥語
落第をせし日夢見る今日この頃
木の芽風地球の自転速めもし
祈る手の先に触れゆく木の芽風
三月十五日 登高会

風に触れたくて水草生ふ高さ
酒を飲みたいから今日は蜆汁
白銀を指呼に蜆を搔く生活
水草生ふ鏡のやうな水面かな
君知るや立子忌の日のあのことを
水草生ふ水底といふ万華鏡
三月十七日 新廣会競馬スクーリング

馬券飛ぶとぶ春雨を纏ひつつ
貴賓席てふ暖かき視界かな
草青む上を蹄の弾みたる
春泥を蹴散らしてゆく十五頭
三月十八日 アーモンドの花吟行会

大朝寝して故郷と氣付くまで
アーモンドの花を育む雨として
うららかに切手買ひたる佳人かな
一輪の花アーモンドてふ氣品
三月十八日 春場所観戦
春場所や浪花言葉の華やぎて
三月二十日 草木瓜会

山笑ふ己が稜線烟らせて
三月の空は氣紛れ旅続く
まだ覚めぬ隣の山を笑ふ山
楽しくて悲しくて山笑ひけり
休日 の電車満員山笑ふ
三月や茫と稜線暮れてゆく
三月二十四日 ホトギス社句会

ロース一キロ蒜は百グラム
蒜を控へ君との逢瀬かな
三月二十五日 野分会東京例会
大空を狭庭のやうに燕飛ぶ
つばくらの空に溶けゆく迅さかな
街騒に加はつてゆくつばくらめ
三月二十七日 若水句会

大航海時代も今も鳥帰る
惚ぶれば彼岸桜の色眩し
さよならは心に秘めて鳥帰る
目刺食ぶ明日の日本背負ふ人
この一本地震知る彼岸桜かな
三月二十八日 目黒学園句会
里山の神降りて来る春祭
敷島の米は宝や春祭
天国に近き磧や土筆摘む
この土手に恋捨てに來て土筆摘む

雑詠

廣太郎 選

夏蒲団平らに妻の息絶えし 柑模原 木村享史
 通夜の客歸したくなき雷の鳴る 同 同
 火葬場へ導師の鉦の冷やかに 同 同
 この月と共に退りて帰郷せん 長岡 安原 葉
 秋惜み受く退任の祝酒 同 同
 新米を炊き祝はるる帰山かな 同 同
 盆の月仰ぎ樹々の香濃かりけり 我孫子 副島いみ子
 片思ひせしまま老いぬ菊枕 同 同
 亡き母もかうして夜なべしてたつけ 同 同
 須磨の月仰ぎ源氏の君気分 東京 大久保白村
 自動ドア自動ピアノと文化の日 同 同
 神の留守ホテルに聖書仏教書 同 同
 真ん中の眼白押されて零れけり 神戸 山田佳乃
 夕影に斑の沈みたる時鳥草 同 同
 抄らぬこと秋晴のせぬにして 同 同
 日溜りに遊ぶ色鳥峡深し 榎原 稲岡 長
 猪垣は残り人去る峡の村 同 同
 海見えぬ谷も日に向き蜜柑山 同 同

雲近き思ひ船上プールかな 神戸 千原叡子
 マッチ磨ることより教へ草花火 同 同
 ナイターのどよめき駅に及び来し 同 同
 位置変へて辺より面へ秋桜 香川 湯川 雅
 花石路の為石配す水配す 同 同
 童心を忘れし我に木の実降る 同 同
 芭蕉破れ花鳥諷詠破れざる 福山 竹下陶子
 火の山の神の吐きたる曼珠沙華 同 同
 空海の真言燃ゆる紅葉かな 同 同
 目立つても目立たなくても運動会 熊本 岩岡中正
 運動会蜘蛛の子散らすやうにかな 同 同
 運動会園長いたく老い給ふ 同 同
 青空の抜け落ち黄落大通り 同 同
 海に日の山に紅葉の濃かりけり 奈良 古賀しぐれ
 島といふ翳海といふ冬日向 同 同
 晩秋といふ東京はこんな色 東京 橋本くに彦
 水音を日毎みがきて行秋ぞ 同 同
 木の実落つ一粒万倍日かとも 同 同
 錦繡の森仕立てつつ神の旅 神戸 涌羅由美
 瀬戸統べし長の古墳に帰り花 同 同
 夜学子のペンの蹟く微積分 同 同
 空に橋地にたんぽぽの帰り花 同 同
 大橋の高さより冬降りて来る 同 同
 五色塚古墳出発神の旅 同 同
 藤井啓子

雑詠句評（二月号より）

純也・比奈夫・しげ人

雅　・佳　乃・仁　義

くに彦・さい雪・公　次

一歩・廣太郎

動くもの見る蠅螂の動かぬ眼　神戸　山田　佳乃

人間爛の場合、動体視力という言葉がある。動くものを見る力のこと、その為には視力が十分なこと、視野が広くて動くものを広い範囲で追従出来ること、反射神経がよく働いて眼球が素早く動くことが大切とされている。一般の動物も略々これに準ずるのではないかと思っていたが、作者の見られたかまきりは、物が動いても眼が動かなかったのである。これは大発見かも知れないが確かに常にそうかどうかは、動物学者に訊ねてみないと分からぬかも知れぬ。たまたま作者のその時見られた蠅螂の視力が悪くて、動くものが見えにくかったり、何も見たくないような身体状況であったかも知れぬからである。作者には今暫く別の蠅螂で観察を続けていただきたい。（比奈夫）

肉食動物が生きた獲物を狙う時、当然対象は動いており、もしこの「蠅螂」が狙っている事に気付けば逃げるであろう。獲物に察知されないように、気付かれずに狙っている、その見据えている目の不気味な静寂が感じられ、とてつもない緊張感が漂ってくる。尋常ならざる迫力がある。（廣太郎）（以下略）

初一念をそ滅びても獺祭忌　東京　内藤星念

俳句に対する初一念を、獺の絶滅が発表されても、その別号に獺祭書屋主人とある子規の忌日に、貫こうと決意したというのである。「をそ滅びても」が、七音ながら、「獺祭」を引き出す枕詞のように働いているとも、見ることが出来る。（純也）

平成二十四年のある日ニュースで、日本獺が絶滅したと報じられていたのを筆者も記憶しているが、自然破壊も関係があるのではないだろうか。奇しくも子規の命日を「獺祭忌」という、その事にかけて巧みに詠んでおられる。俳人の心の中には永遠に正岡子規は生き続けているのである。（廣太郎）

天地有情

外したい酸素吸入秋日和 東京 田村 元
 頑張れよ生きる努力を冬の蝶 同
 誘蛾灯ぱちと地獄の一丁目 同 稲畑廣太郎
 明易や病窓に見る神戸の灯 同
 冬帝に母の余命を託したる 神戸 三村純也
 冬帝のほほゑみ母に授からむ 同
 色鳥も来し邸奥の句碑の庭 長岡 安原 葉
 山がかかる圓通寺道柿の秋 同
 存へてかくも豊にホ句の秋 神戸 後藤比奈夫
 地獄耳なりしが虫も聞えずに 同
 菊月や好青年は娶りしと 東京 今井千鶴子
 抜かりしよ今日新米の水加減 同
 眉月の白し金木犀かをり 同 河野美奇
 子の帽子追ひゆく砂丘秋日和 同
 ねぶたの見し昂りにあり眠られず 岩見沢 奥田智久
 ねぶたの夜闇の深さは空にあり 同
 露けさといふ気高さや人の世に 神戸 長山あや
 露となりきらめく星のしづくかな 同

吹き白め吹き白めつつ葛嵐 明石 中杉隆世
 紀の国の無尽蔵なる蜜柑かな 同
 南面の斜面峰まで蜜柑山 樺原 稲岡 長
 談笑や蜜柑むく間の軽き黙 同
 草踏んで旅は露けきものばかり 熊本 岩岡中正
 大空に帆かけて風の芭蕉かな 同
 知合ひのやうに冬日の差して来る 神戸 後藤立夫
 八景の中に大根を干しにけり 同
 奥庭の緊張を解く添水かな 宝塚 水田むつみ
 通草蔓引く一山の音たてて 同
 見えんと思ふ心に月育つ 金沢 藤浦昭代
 大会の人みな今宵月の客 同
 瀬音より秋の涼しさ誘へる 吹田 宮崎 正
 鉦叩しづけき庭をなほ鎮め 同
 六甲の青空に着く紅葉狩 奈良 古賀しぐれ
 風音のちらばつてゐる落葉宿 同
 これ以上なにを望むや今年米 東京 内藤呈念
 垂るる穂をなほも沈めて稲雀 同

心子選

天地有情句評

汀子

色鳥も来し邸奥の句碑の庭 長岡 安原 葉

句碑の庭に色鳥も来る楽しみ。

地獄耳なりしが虫も聞えずに 神戸 後藤比奈夫

秋の虫の音が聞こえない地獄耳とはまこと俳諧。

外したい酸素吸入秋日和 東京 田村 元

抜かりしよ今日新米の水加減 東京 今井千鶴子

体調を助ける酸素吸入を外せないつらさ。

しまった！新米だったと気づく作者。

明易や病窓に見る神戸の灯 東京 稲畑廣太郎

眉月の白し金木犀かをり 東京 河野美奇

母の病窓から見える神戸の夏の灯。

眉月を仰ぐ時の金木犀の香り。

冬帝に母の余命を託したる 神戸 三村純也

ねぶたの夜闇の深さは空にあり 岩見沢 奥田智久

危篤の母上への祈り。

東北の祭りの倭武多の明るさと対照的な夜空。